
片思い。

Sorairo 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片思い。

【Nコード】

N9637N

【作者名】

Sorairo 光

【あらすじ】

片思いの女の子のお話。

私、栗原くりはら サキは、名前が珍しくカタカナだ。
ちよっとボーイッシュなところがある私は、天然系として通っているけど、自分的には結構突っ込み役ではないかと思う。

「んぎ!？」

さて、今の声はなんだと思う人もいるだろう。

この声は……私が重いものを持ち上げたときに出了た声だ。

なんとも乙女らしからぬ声なのは知っている。

そんな乙女らしからぬ私を、女の子扱いしてくれる人も……いるにはいるんだけど……。

「大丈夫? 持つよ、かして。」

「……へ、あ……。」

私がまだうんともすんとも言っていないうちに、荷物は私の手を離れた。

私がやっと持ち上げた荷物を、そいつは簡単に運んでいく。

あつれえ? おかしいな……重いはずなんだけど……。

「あ、あの!! ありがとう。」

「いいって。」

そう言って笑ったのは、木萩きはぎ 周二しゅうじ。

同じクラスの、クラス替えしたときに、私の前の席になった男子だ。

「わり、すご……。」

あっという間に荷物を運び終わって、思わず拍手をしている自分に気がついて、はっとする。

いや、素で拍手をしていた……こんなだから周りに天然だって言われるんだ。

どうせなるなら、クーデレのほうがいい。

二次元なら、ヤンデレも嫌いじゃない。

正直クールでもいいけど。

やっぱクーデレの長門〇きは可愛いと思う。

でも、木萩君はみ〇るちゃんのほうが好きだという。

そして、ロリ好き。

残念ながら私はロリ系ではないし、み〇るちゃんのようなナイスバディーでも、み〇るちゃんのような、強制されたらやるキャラではない。

嫌なことは嫌なことで、やろうとはしない。

話が合うと思って話をしていたら、彼は百合好きだと言うし……もう、手の施しようがない。

私は、腐女子ではない。

だから、BLよりはGLのほうがまだ好きだ。

でも、彼は腐男子だ。

なんかね、うん……もういい。

「どうかした？」

「え？あ、うん。なんにも……ただ、疲れたなって思っ

て私が苦笑すると、「確かに。」と彼も笑った。

こんなに私に近寄ってきてくれた男子はこれで二人目だ。

一人目は、友達だとは思って居なくて、ひどく傷つけた。

私が好きな人とも上手くいなくて、ひどく傷ついた。

もう、思い出したくもない記憶のひとつだけど、そんなこともあつ

て、私は人を好きになるのが怖い。

本気になるのも、なるのも、怖い。

恋は……したい。

でも、どこかでしたくないと叫んでいる。

頭がぐちゃぐちゃになる。

まるで、パラジク〇ロベンゼンと、アンチク〇ロベンゼンを混ぜ合わせて、だんだん自分がどこにいるのか分からなくなっていくみたいだ……。

「……せかゝいで、一番お姫様、そゝいう扱いこころゝえゝてゝよね♪」

あれ？ボカロ口ずさんでるや……これだから、オタクって言われるんだよ。

あんまり詳しくもないのに。

オタクってある意味、博士でしょ？

私、ボカロの博士ではないと思うんだよね。

がちやっぱいどが売り出すとか、つい最近まで知らなかったし、キティラーの猫村い〇はがいたって事も、VY〇がアンインストールのカバーがめちゃくちゃうまいってことも知らなかったし……。

「俺、それあんまり好きじゃない……。」

ロリ、天然、純情が好きな彼には、ツンデレはあんまり通用しないらしい。

「そうなんだ……ぎゃー！や！む、虫がっ！！」

私は目の前に毛虫がいるのに驚いて、体をのけぞらせた。

でも、彼は冷静に、「あゝほんとだ。大丈夫？」と言って虫を遠ざけてくれた。

いつもそう……私がギャーギャーやってると助けてくれる。

こんな私でも隔てなく、女の子扱いしてくれる……。

彼のことは、正直、好きだと思う。

でも、心臓はどきどきしない。

こんなものだっけ？恋って……。

多分、木萩君の近くににいる女子って、私が一番近くににいるんじゃないのかな？とか思ってたりするけど……。

こーゆー態度されると、私が特別なのかな？なんて勘違いしそうになる。

いいのかな、勘違いしても……でも、私は？好きとは言えるけど、愛してるかと聞かれたら分からないよ……。

―数ヵ月後―

すっかり、いつもどおりで、何もかもがいつもどおりに過ぎていったある日、木萩君が「だぁああ！うるせー！」と叫んでいた。からかわれているらしい。

「どうしたの？」

「ん？木萩の好きなヤツの話。」

私が聞いた男子は、いい笑顔でそう答えた。

え……？え？まって？何？それ……？

「好きだった!!」

木萩君はそう言って訂正し、「人の傷をえぐるな！馬鹿やろう！」と付け足した。

「え？何それ？」

私がきよんとしていると、私の後ろから女子が来て、「え？何？うちも聞きたーい!!」と言った。

「あれ？みんな知らない？結構知られてると思ったんだけどな……。」

「

そんなこんなで話し出した内容は、彼は好きな女子がいたこと、告白して、付き合って、28時間ちよつとで別れた事。

全部知った。

誰が好きだったかも、今は好きな人がいないことも、私は”特別”なんかじゃなかったことも。

なあんだ……へー……そー……だったんだ？

胸が、苦しくなった。

じゃあ、何で私によく話しかけてきてくれたの？

なんで、優しくしてくれたの？

どうして……？

質問があふれ出して、私は、自分が醜くなっているのを感じた。

ああ、何だ……私……馬鹿みたい。

部屋でうずくまって、苦しくなる胸を押さえつけた。

何で……こんなに苦しいの？

好きとか分からなくなってたくせに、本気になるのも怖かったくせに……ああ、なんだ……もう、こんなに……。

私、木萩君のこと……好きに、なってたんだ……。

「うう……。」

硬く結んでたはずの口からうめき声が漏れた。
彼女と別れたのはまだほんの数ヶ月前のこと。

多分、木萩君は、彼女のこと好きだよね……？

だって、簡単にあきらめられないから、好きって言うんでしょ？

苦しい体を引きずって、重い足取りで、翌朝も学校に行った。

その翌日も……。

ブブブブツ

不意になったケータイのバイブ音。

自分の部屋で横たわっていた死体のような重たい体を持ち上げ、ケータイの画面を覗き込んだ。

”最近元気ないね？”なんで気づくの……？

どうして気づいちゃうの……。

”そんなことないよ？”

”そう？”

”うん、それよりも、木萩君、まだあの子のこと好きなんでしょ？”

”ばっ、何言ってるんだよ。”

”凶星、だねwグチなら聞こうか？”

”それは大丈夫。もう、ずいぶん風化したよ。”

うそつき……よく観察してたらまだたまにあの子見てるくせに……。

”まあ、ベットシートが女の子のキャラ入りで、枕カバーもそうで、キャラの抱き枕があったりラブ○ラスの写真をいつも寝る前に眺めてるなんて言いふらされてたら、さすがに一般の彼女は引くよねw

”

”う……！まあ、一応両思いだったらしいんだけどさ、彼女、影で

俺のこと「きもい」って言ってたらしくてさ……orz”

影でキモイって言うなら、付き合わなきゃ良かったのに……なんで付き合ったの？おかしいよ……。

”……大丈夫！木萩君は、きもくないよ！”

”ありがとう！”

きもくはないよ、キャラにはあはあしてるわけじゃないし、二次元

とリアルの区別がついてない人じゃないし……それくらいなら、オタクとしては当然だと思う。

私はそういうの一切もってないけど、木萩君をキモイなんて思わない……。

私なら理解して上げられるのに、とか思うけど……。
知ってるよ。

君が好きなのは、ロリ系天然の明るい女の子。

好みも良く知ってるはずだった……誰よりも知ってるのに、君は絶対に私を見てくれない。

私はロリ系じゃないし、そんなにすごく明るいわけでもない。

でも、天然ってところには、わずかな望みをかけてたのに……。

本当は、何も分かってなかったんだね、自分が……恥ずかしいよ……。

泣きそうになって、唇をかみ締めた。

大丈夫、私の気持ちはまだ誰にもばれてない。

彼にも、周りにも、誰にも……気づいてるのは私だけ。

変に避けられるより、このままがいい。

―数日後―

「でさ……。」

「あ、ちよっとごめん。大丈夫？」

木萩君が私との会話をさえぎって、クラスの子のほうへ走って行った。

その女子は。重たそうな荷物を抱えていた。

「俺が持つよ、かして。」

「あ、ありがとう♪」

その子は甘ったるい声を発して、可愛く笑った。

木萩君の好みそのものではないだろうか？

可愛くて、背がちっちゃくて、可愛い声をしてて、ロリ系で、天然もありそうだし……。

”大丈夫？持つよ、かして。” いつかの記憶と重なった。

あ……なんだ……やっぱり、私だけが特別とかじゃなかったんだな……。

じゃあ君は、誰に対してもあんなふうに笑うんだね……。

私は、君にとって、ただ、近くにいるだけの、友達だったんだ……。
辛くなって、その場を離れた。

私は、特別なんかじゃなかった。

ただの友達だった。

目が良く会うのも、会話が多いのも、ただ、私が”気の合う仲間”だから……。

もう、わかってしまったの。

君は絶対に私を見ない。

きっと、今だって、新しい恋が芽生えたかもしれ……。

それでもいいよ。

それでもいいの。

この気持ちがいつか自然に消えるまで、私は君を見守ろう。

邪魔はしないよ。

応援してあげるよ。

辛くても、見ないって分かって、振られるしかないってわかって、告白なんてできるほど、私は強くなかないから。

それでもいいから、今はまだ、そばにいさせて……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9637n/>

片思い。

2010年10月11日03時37分発行